

ユマニスト ペト
ラルカの隠棲術

Otium literatum



Tomomi KOIZUMI

目次

はじめに	1
フランチェスコ・ペトラルカ略歴 (1304-1374)	2
恋	3

はじめに

ペトラルカの著作「De vita solitaria (隠棲生活)」(1346-1366)は、おおらかな自然賛歌であると同時に、桂冠詩人としての名誉を妬む知識人達との権力闘争に疲れ果てて、田舎暮らしをする亡命者さながらの自分自身に対する「負の書」であり、そして、男の「欲望の書」です。

過去の栄華の思い出、傲慢さ、欲望は様々なジェラシー、怨み、暴力等の「負のエネルギー」を産み出してゆきましたが、ペトラルカが語りかけるように綴られてゆく文章によって、少しずつカタルシスされて穏やかになってゆくのがわかります。

実は、ペトラルカの生涯にわたって一つの秘密がありました。

それは秘められた恋の思い出。

遠い昔に、アヴィニョンの教会で一目惚れしてしまった美少女ラウラ(ローラ・ド・サド)の面影が亡霊の様につきまとい、表向きにはプラトニック・ラブとして昇華されてゆく中、心中、光と影が交差されて揺らいでいたのです。

今回、ペトラルカの「De vita solitaria」と、理想の恋人・ラウラに捧げられたラブ・ソング「カンツォニエーレ」を基にして、揺らぐ心をいかに鎮めてゆく事ができるのか、その隠棲術に親しみたいです。

フランチェスコ・ペトラルカ略歴 (1304-1374)

イタリアの詩人、ユマニスト (15 世紀から 16 世紀のヨーロッパ、ルネサンス期において、ギリシャ、ローマの古典文芸や聖書原典の研究を土台として、神性や人間の本質を考察した知識人のこと) であったペトラルカの父は公証人であり、詩人としても知られていたが、教皇党に属した政治家でもあり、敵の政党との闘いに敗れて、追放処分を受けた亡命者であった。

ペトラルカは法学を修めた後に、ラテン語文法、古典文学の研究に精を出して、人間を学問の中心におき、人間のよき生きる道を探求する為に、ラテン古典文学とキリスト教を折衷させようとした。

1341 年にローマ、カンピドリオの丘において桂冠詩人の名誉を受けたものの、敵が多く、頼りにしていたミラノの大家ヴィスコンティ家とも複雑な権力闘争に巻きこまれたせいで縁を切り、しだいに孤立してゆき、隠棲生活を送ってその波乱に富んだ生涯を終えた。

恋

月にあるという丸い桂は、深緑色のなめらかな葉でペトラルカの庵をよそおう。
頭上に輝く貴女の冠をおろそかにしてしまって、もうどのくらいになるのだろうか...
ペトラルカは寒さに赤くかじかんだ人差し指で、そっと枯れ葉に触れると、ぼらぼらと地上に崩れ落ちてしまった。
月桂樹の茂。銀色の青銅の満月。
美青年アポロンの豎琴から奏でられる、たいそう美しいその音色に誘われるようにして、貴女は踊れる。背後から驚くように、愛人を厭うダフネが天に乞うように膝を折りたたんで、忽ち緑々としたこの冠に変化したばかりなのに。

「ラウラ」

優しい黄金色に咲くような貴女の顔は、ペトラルカに栄光と勝利を授けて、自信を与えてくれたのでしょうか？
いまだペトラルカの問いかけに答えずに、柔らかく半月形の脛を閉じたままで、愛らしい受け口は無情に閉じられたまま。
二人の出逢いは、太陽と月の光が届くことの無い、冷え冷えとした石造りの礼拝堂に迎え入れられるままに。
その時のペトラルカの心は、腐敗した聖職者達との諍いにささくれ立っていたものの、清らかな美少女の新鮮な踊われに教会のすべての集いを祝いたい衝動にかられて、今までの憎しみの炎は消えてしまった。

「ラウラ！

その日、その月、その瞬間が永遠に祝福されますように。季節も、天気も、この美しい場所で、ようやく辿り着いたこの場所で、貴女の美しい瞳が私にすべてを結びつけてくれた。」

恋人はその時、息を止めたまま一瞥も投げずに、虚しい風をこちらへと送るのみ、通り過ぎて行ってしまった。
小さな輪郭を繊細に装う薄絹が、奥へと吸い込まれてゆくまま、つよく、撃たれたまま、ペトラルカはそのまま立ち竦んでいる。

美しい雷電は、そのまま言葉無く、眼差し交わす事無く、魂の奥深くに生き続ける。

「今宵の月は、冴え冴えしている…」

ペトラルカは、この隠棲の地に落ち着いて以来、太陽をあえて遠ざけるようになっていた。

まるで太陽のカミが恋して追いまわし、永遠に手に入れた女神の化身としての桂冠を、いつか掠め取られてしまう恐ろしさに悩まされていたから。

静寂の森を歩きまわっては、穏やかさを一步一步感謝したい。

憂う事無く、以前の様に悪友達に取り囲まれて、姪靡に笑い合って、受け答えしながらも押し合って、もみくちゃになって、引っ張り合って、怒鳴り合う。酔いどれの乱痴気騒ぎ、飛び散ったソースでべたべたの食器、吐き気をもよおす肉汁に真紅の血液と、純白の骨があちらこちらに飛び散っている。

それに較べて幸せ者は、ただひたすらに自由のみを追い求めて、鬭争を避けて、虚栄心から身を護っては、少しずつ天空に眼差しを向けてゆき、心が和らいで崩れてゆくのに任せるのだ。

ふと、春のような穏やかな風が、丸い月光の光とともに淡黄緑色の花を足下に落としてゆく。

ラウラが母親となった風の噂は、ペトラルカの顔を真っ赤に上気させ、その晩街に繰り出して、愛してもいない女達との愛欲に心晴らした。

ぐたぐたに酔って、飽きる程食べて、燃える衝動に駆られるままに、相手の顔など覚えてはいない。

「ラウラ!ラウラ!」

輝々と照らす月光に、二つの掌にくっきりと静脈と皰が映し出されるまま、ペトラルカは心から呻く。

暗い水鏡には、かつてのみずみずしい若さは無く、白髪の衰え。

老いと怒り、夜は混乱、深淵、恐怖という姉妹を持って、無知の深淵と後悔の中に、真っ黒な闇は地上を這い回る盲目という涙にむせび泣きながら

「ああ、ラウラ、早く来たまえ。抱いておくれ。もっと、強く。暖めて。」

夜が訪れる度に、こうして畏れ入る者の前に、大群の行列がやって来る。手に手に、燃えさかる松明の炎の中、美しく死に化粧した恋人はどうやら柔らかな紅色のクッションに横たわっているようだ。

「ラウラ! どうして貴女は沈黙し、そしてこの手を放してしまうのだろうか? どうして時を待たずに、命と若さを使い果たすのですか?」

はじめてペトラルカは、あれほどまでに渴望した恋人の瞳、その紫色の憐れみに気付かされている。

奇妙な感覚がよみがえってくるままに、失われてしまった若々しさが迸り、激しい恋に駆られる青年はいまや恋人と対面している。

さ迷う魂を鎮めながら、二人は夢で落合って、死士としてのペトラルカはいつの間にか頭上の冠が、緑々と盛んに生い立っている。

ところが、内側から迸るような生命の力が、少しずつ恋人から抜かれてゆき、弱々しくなって、透明になってゆくのは、愛する者としては耐えられない事。

恋する青年の死はもはや誰の役にも立たず、人生すべて、害を与えない事のみ待っている。ひたすらに、今まで満ちたりた幸せな人生の表現に、美しい終末をもたらしたいと、魂をこめて切望しているのみ。

その時、ペトラルカは、赤く燃える地平線の向こうから、かつての論客達がやって来るのを見た。

「おろか者、ペトラルカよ!

意気地無し、腑抜け男!

反論せよ! 答えよ! ペトラルカ!」

裂けるような頭痛が詩人を襲って、地面に頭を抱えてうずくまると、数多の書が落ちて来る中、かつての旧友達に取り囲まれている自分に気づく。

「あまりにもおしゃべりすぎて、おろか者と思われるより、沈黙のせいで、たいした才能なしと思われる方が良いのか?」

「真に勇気ある者は、ほとんど無言で、多くの事を行います。同様に、賢い人は道理にかなった事だけを話します。」

「おろか者、ペトラルカ!

沈黙は心の狭い者にとっては知恵の代わりとなり、無知な者には能力の代わりになるのさ。」

ペトラルカは今、深夜の闇を身に纏い、おのずの自尊心をいたく苛まされているが、それは目にしたくなかった自分の影であった。

若かりしのペトラルカは、酒に酔い、そのまま倒れこむようにベットに仰向けになって、日中の憂い事に疲れ果て、虚栄と哀しみに頭も腹も満たされていた。怒りの感情はあまりにも心身を侵しているゆえに、夜は穏やかに過ごせない。敵の存在はあまりにも多く、苛々させられて、大声の叫び声にみみしく、何を信じて良いのかまったくわからずに、こうこうと変わるその気持ちに動かされるままに、嘆きに嘆き、終わりなき紛争。

ペトラルカは長い鉄の鎖でつながれてしまっており、月桂冠のみ生き生きとあたりを照らし輝いている。

思うに、地上の権力者である王侯達と、鎖でつながれたままの囚人達との違いは無い。ただ異なるのは、鉄の鎖か、黄金の鎖。

自尊心のあまりに強いペトラルカは、権力に抵抗して「逃亡」した心の弱さを認める事が出来なかったが、いまだに世間の評価や非難されている意識に支配されるまま、迫害意識に追い詰められてゆき、すべては自分の内部から来ている事を知らなかったのである。満天の降りそそぐ星々と、月光に照らされて、ラウラという貴婦人はかつての純潔の少女の姿のまま、詩人の魂の苦しみを慰めに訪れてくれる。

憐れみはその心に抱いて、導かれるままに、何故なら他に救いを見い出せないものだから。

ペトラルカの重苦しい地上での生活を、第三の天界から降りて来て、愛情に満ち溢れて、その胸に抱いてくれる。

憐れみをもって耳元にささやくのは、

「誰に対しても憎しみや不満足の感情に囚われる事無く、地上の旅の途中で、倦み疲れること無く、気持ちを落ちつかせて、太陽の光の輝きに照らされて、心は歓喜に包まれてゆき、清水の流れに耳を傾けながら歌をうたいなさい。」

豪華絢爛なるかの聖王、賢王、予言王の宮殿とその都市には、騒がしい町人達、商人、法律家、職人、医師、芸術家、音楽家、はてのはて、詐欺師や泥棒達も起き、一緒に目覚めて、急ぎに走っている。王の心は哀しみと混乱に満たされてしまい、誤った意見はあちらこちらに広がって、孤独の散歩者はついに行き着いた洞窟に物憂い、豎琴を鳴らしては安らぐ。

あの太陽の子が、豎琴をかき鳴らし追ってゆく美少女は、今はもう怯える事もなく、さやさやと老いる事の無い木の葉を鳴らしてともに歌っている。

ほっとして腰を倒したペトラルカの手を握って、ラウラは呟く。

「この天で再び私達はめぐり合うでしょう。多くの苦しみを乗り越えて、ただ貴方を待ち望んでいます。二人でまた、金星天に昇ってゆき、あれほど貴方が愛してくれた私の美しい月桂冠を与えましょう。」

何一つ嘘はなく。

何一つ隠さない。

物憂うペトラルカは、はっと顔をあげた。

「貴女にこの手紙を書いている時、私の魂はいつもより沈んでいて、風がかき乱してしまふ木の葉の音と、周囲の水のせせらぎが、この言葉のみを聞かせてくれるように思えます。

そう、貴女の忠告は胸に響くまま、

そう、貴女の決断はまったく当たっていて、そう、私達の恋は...」

月光の円い影の中、手を握って、抱き合ったまま、二つの月桂冠は合わさって、すでに二人はどこにもいない。

ユマニスト ペトラルカの隠棲術

著 小泉友美Tomomi Koizumi

制作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
